

シルバ－ 江田島



第 3 号

平成 6 年 7 月 1 日

江 田 島 町
シ ル バ －
人 材 セ ン タ ー



平成 6 年度 5 月期定期総会

平成六年五月期

総会に出席して

去る五月三十日午前十時から開催された総会に出席しました。町役場三階大会議室の会場はやや緊張感がただよっていました。二井町長、平木町議会議長、曽根町助役、宇根福祉保健課長の四氏の来賓の臨席を得、会員五十八名が出席して定刻に開会されました。森事務局長の司会で会は進行し、初めに山佐理事長の挨拶で会の役割と抱負が述べられ、本年は飛躍の年とする事を強調されました。つづいて二井町長は祝辞の中で当センターは短期間に県内でも有名になる程の実績を上げた。これは会員の努力で行政、地元民に喜ばれる事をした賜で、この火を消さない様今後とも継続してほしいと述べられました。平木議長は高齢化社会の活性化はシルバーからと結ばれました。祝電は十二通紹介されました。

総会は下谷議長の元で、次第は順調に運び、約一時間で閉会となりました。会員数も増え、契約高、契約件数ともに大幅に増加し、公共と民間が逆転した様です。事業では術科学校の見学案内と郵便局の自動現金預払業務も行う事となり、収支も当初予算を約千二百万円も多い決算となっています。総会が終ってこれから最初心に帰って今後共頑張らなければと心に誓って会場を後にしました。

腰を痛めぬために

まず準備体操

四月の中旬、小用にある江能水道配水管理センターの作業所を訪ねました。仕事は浄水池の「砂かき」

「砂かき」とは、

「浄水池の底に敷かれたヘドロを含んだ砂をかき出し、新しくきれいな砂を入れる作業。壁ぎわはシャベル、中はジョレンで四筋に集め、それをベルトコンベアで外に出し、一箇所に集めて乾燥させ、ヘドロを取り除いてきれいな砂にします。」

この作業は七名でやります。「水が抜いてある」と班長さん宅に連絡があると、班長さんは班の人たちに連絡、作業につきます。

一日中、シャベルやジョレンで土をかき集め、コンベアにのせるので腰が痛くなります。だから、作業につく前に準備体操をします。準備体操をして、

心も身体も仕事にかかるといいう構えをつくらないと腰をいためます。

「砂かきは一浄水池で十日をみていますが、とり出す砂



に働く仲間

と話してくださいました。事務所の方のいれてくださったコピーをご馳走になつていると、

「この仕事は役場の次に大きいのですよ。」

「広報誌、二回だけでなく、もっと回数多く出してくださいよ。」と要望されました。

の量ですがつてきます。前にやった池は五十センチ砂を上げました。」

(宇根川さん)

所長の平井さんは、

「この浄水池が出来たのは昭和四十三年、水は太田川からとっています。砂かきは六週間に一回します。かき取った砂は水でよく洗って乾燥させます。浄水池の砂の総いれかえ(補砂作業)は六年に一度します。」

業者に委託するよりシルバーに頼んだ方が仕事もいねいで、助かります。特にこの班の人たちはとてもよく仕事をしてくれま

す。」

と話してくださいました。

事務所の方のいれてくださったコピーをご馳走になつてい

と、

「この仕事は役場の次に大きいのですよ。」

「広報誌、二回だけでなく、もっと回数多く出してくださいよ。」と要望されました。



平成 5 年度 事業実施報告(抄)

1. 現 況

(1) 会 員 数 195名(男 108名, 女 87名)

注: 町内60歳以上で会員の占める割合
5.0%($\frac{195}{3,907}$)

(2) 契 約 高 49,170千円

(3) 就 業 率 67.7%($\frac{132}{195}$ 名)

(4) 公共と民間の割合

区 分	受注件数	割 合 (%)	契約高(千円)	割 合 (%)
公 共	348	36.4	20,974	42.7
民 間	608	63.6	28,196	57.3
計	956	100	49,170	100

2. 就業率のレベルアップ(目標 65%)

就業率は67.7%で、目標の65%を2.7%上回りました。

これは、新入会員の高就業、術校ガイド、手打うどん等の新規事業によるものと思われます。

計画と実施状況は次のとおりです。

計 画	実 施 状 況
剪定の講習(9月)	実施済み(2月)
研修、交流会への参加	上部機関実施研修参加3回, 当シルバー研修3回
術校ガイドの開拓	6月26日実施(延 138日 183人)
開拓委員会の開催	10月12日実施済み

どんどん数に

なっていく

四月二十六日の昼前、町長さん宅の竹藪(家のすぐ裏手にある)の伐採の現場を訪ねました。

四人の男性は竹の伐り出し、女性二人はその竹を一箇所に集める作業の最中でした。

「二、三十年前にくらべると藪が増えていきます。畑を作らなくなっているからでしょう。これも、昔は町長さんのお母さんが作っていたのです」

竹を伐り出した所を見ると、確かに以前は段々畑であったことがはつき



りとわかりました。

「このまま作る人が減っていけば、いまに江田島の山は藪だらけになるでしょう。」

この言葉に、畑が藪にかわっていくことへの悲しみが聞きました。

「この冬の雪で竹が折れており、伐り出すのに苦労します。」

伐った竹はお母さんたちが一箇所に集める。一日中運ぶので、腕が痛むとこぼしていました。

「こういう仕事は冬の仕事ですよ。」確かにこの日は天気がよく、それに昼前とあって気温が高く、伐る人も運ぶ人も汗だくでした。

「伐った竹を早く燃やしないと、新しい竹が生えてきて処分が大変になります。」

と、伐り出した後のことまで心配しておられました。

「この作業、あと十日ぐらいはかかるでしょう。」

「このあとハチクが生えます。ハチクはおいしいから」

取りに来たら、出ているのを鎌で切ればいいのだから。」

と声をかけてくださいました。

編集会議の席で板垣先生



われら、とも

の、
「畑をつくっていた時は降った雨水がきちんと流れていたが、ヤマになると排水に気を配る人がいなくなり、下の畑や家の人が迷惑しています。」
との話にみんなうなずいていました。

サビ落としに 時間がかかる



四月二十六日、交流館のすぐ近くの藤井さん宅の塗装の現場を訪ねました。

四人で、

二階のトタン屋根の塗装。

私が訪ねたときは一階の屋根の塗装の最

中でした。

「ペンキを塗る前のサビ落としに時間がかかります。これが終われば、

仕事は半分以上すんだようなもの。サビをきれいに落としておかないと

塗ったペンキがはげてきます。」

「いまはいいけど、夏の暑さかりの仕事はきついです。」

話をしている間も刷毛を動かす手は休みません。大屋根に三人、一人は

ひさし。

「昨日は前の家をやりました。次は宮ノ原の新しい児童公園の仕事にかかります。」

屋根の塗装は高い所なので、それだけ気をつかうとのこと。

「気をつけて下りてくださいよ。」と声をかけられ、現場を去りました。

見事な梅林を つくりたい

五月十八日、江南にある青木病院が買いつけた畑の草刈りの現場に行きました。そこは旧道から山にむけて少しはいた谷あい。下手には水を張った棚田が数枚、江田島にもこんな所があるのかと驚きました。

畑では山佐さんら三人が五十センチ以上伸びた雑草の刈取りの最中、休憩をとつてもうい、森さんと五人でいろいろと話し合いました。

「病院から何でもいから植えてくれと言われています。下の畑の梅は植えてから三年目。だから、これも梅を植えたらいと思えます。」

枯れて数年経ったみかんの木が数本、それにまじって八朔の生きている木があります。

「八朔は残しておき、株のまわり一メートルぐらい草をきれいにとって肥料をやりましょう。」

聞けば、この農園の管理をシルバ―が任せられたとのこと。

「将来、ここを梅林にして、軽症の患者さんの梅見の場にできれば。」と、三人の夢はふくらむようです。



「ハミが出ると地元の人に言われ、道の草を刈り取りました。二人がハミに噛まれたら大変と思って……。おかげでここを通った地元の人に喜ばれました。」
「ありがとうございます。」
森さんと私、まずは叩頭。
「どうせやるならきれいにしたいので、刈った草は焼くつもりです。それに、日当りをよくするために東の丘の藪を少し伐らせてもらえたらと思います。」

森さんの話ですと、この三人の方々にこの農園の管理をまかせることになるだろうとのこと。そのことを意識しておられるかどうかかわりませんが、立派な梅林をつくるという意気込みが強く感じられたインタビューでした。

仕事をよくしてもらって 助かっています

六月七日の午後、小用のコミュニティセンターを訪ねました。

受付でたずねると「二階か三階にいらっしゃいますよ」との返事。お二人は二階のトイレの清掃を終えられたところでした。

「毎週二回、火曜日と金曜日の朝九時から午後四時まで館内の清掃をしています」。

館内を案内しながらそう話されます。聞けば、このセンターが出来て一カ月半くらい経った頃からずっと館内の清掃をしているとのこと。

「一年半近くなりますね。午前中に一階、二階。午後に三階を行います。ジュータンの敷いてある部屋は掃除機で、そうでない所はモップで拭きます。月に二、三回はペランダの排水溝の掃除、どうしても砂がたまりますので……」。

「二階にやつと掃除用具入れができ、とても助かっています」と嬉しそうに話されます。

帰りぎわ外のさつきの剪定をしておられた館長さんにお会いしま



した。

「お二人に来てもらっていて大助かりです。言わなくてもきちんと仕事はしてくれるし、頼めば喜んでそれをしてくれる」。

とべたほめでした。

材料を運びあげる のが大変でした

「くるまで」（通称「焼場」）の墓地の整備の現場を訪ねました。

初めて聞く場所なので、事務局で地図を書いてもらって出かけました。小用から秋月へ通じる道の途中、くむら（久村）で右に折れ、山道を登ります。亀田石材店の作業所を右に見、間違っていないと確認して林道を登り続けました。墓地に通じる細い坂道のとつときにタンクを積んだ軽トラがとまっています。

「ポンプで水を上まで送ったんですよ。水を運び上げるのは大変ですから」。

不審顔の私にそう説明してくれます。「仕事は終わったのですが、いま上で片付けをしているので、あがってみられては……」。

言われて急な坂道を登りました。尾根の現場では道具の片付けの最中。

「材料を運びあげるのが大変でした。私はブロックを積んだり、土間をセメントで塗り固めればいいのですが手伝いの人はおおごとでした」。「材料は」



「セメントに砂利。一輪車の前に網を結びつけ、二人が前で引っ張り、一人が後から押す、セメントは一回に一俵、砂利は二俵。砂利は十二袋。途中に小石があると進まず、本当に大変でした」。

と進まず、本当に大変でした」。

「昨日の朝からかかって、今日の二時頃に完了しました」。

そして、「これは「シルバー」のする仕事ではないですよ」。

この言葉に、みなさんうなずいていました。

「土間は本当なら五色石を厚さ十七センチくらい敷きつめる方がいいのです。そうすれば水はけもよく、草も

生えてこない。でも、私たちの手にはおえません。そこで、三センチ程の厚さにセメントを塗って土間にしたのです。さいわい下の墓の上ぎわに排水溝があったので、できたのです」。

ここは江田島一の墓地です

「まあ、冷たい水でも一ぱい」いただいたカップ一ぱいの水のおいしかったこと。

「暑かったでしょう。周りを木で囲まれて風も通らないし……」。

「昔は松の木の下に墓が建ててありました。きっと、墓がやけないようにと思つてのことでしょうが」その松も多くが立ち枯れています。

「あの松を何とかしないと。倒れたらおおごとになりますよ」。

「このすぐ下が焼場でしてね。人が死ぬと、すぐに割木、石炭をかつぎ上げます。そして座棺を四人でかついで登る。大変なことでした。死者の足を持って座棺に入れ、頭を煙突の側にして火をつけるのです……」公営の火葬場が出来たまでの火葬の様子を話します。

「ここは江田島一の墓地ですよ。見れば、尾根の上にずっと墓地が続いています」。

「焼場が近いし、作れる所は全部畑にして、残った尾根を墓地にしたのでしょうね」。

「何か事があると近所の年寄りに聞きました。隣近所は大事ですよね」そういう言葉を聞いて辞去しました。

高齢者が地域を支えている

— 山口市シルバー
人材センターを訪ねて —



二月一日、森事務局長をはじめとする私達一行六名は山口市の「山口市シルバー人材センター」を訪ねました。雪の残っている寒い日でしたが、山口の方は会場を別に用意して待っていてくださいました。

センターがどういふことをしているかを地域に知らせる

はじめに広報誌発行について聞きました。

山口市シルバー人材センターでは年間三回、三月、八月、十二月に発行しています。原稿は地域班（十六地域）の世話人に依頼、一回の発行に大体三地域から原稿を集めます。広報委員会を設けてはいるが、編集作業は事務局員が行っています。写真はいまに撮っておくよう心掛けており、一回発行するのに大体二ヵ月かけています。これから出す十周年記念号は事務局でなく会員主導でつくる計画でいるとのこと。

広報誌発行の主眼は人材センターがどういふ仕事をしているかを地域

の人たちに理解してもらうことにおき、内容もそういう記事を主体にしています。

高齢者が地域を支えている

山口市シルバー人材センターでは「高齢者が地域を支えている」のという自覚をすべての会員が持つよう、徹底して会員教育を行っているとのこと。理解が十分でない人とは時間をとってじっくり話すことにしています。この自覚が会員に育つと目に見えて会員が変わってき、元気になります。「高齢者が、元気な高齢者が地域を支えよう」をモットーに徹底して会員教育を行っているという話に私は目の覚める思いがしました。

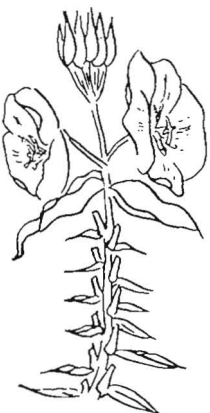
また、事業をすすめていくうえでの基本は職員の和。そこで、誰が来てもいいねいに温い応待をすることに心掛けています。これがなければシルバーは発展しないとも強調されました。

外にむけてシルバーを宣伝

シルバーセンターがどういふ仕事をしているかを市役所や報道機関に強くアピールしています。そのため報道機関がこのところシルバーの事業をよく報道してくれまます。その結果、会員がシルバーの会員であることに自信をもち、それまではあまり人気のなかったシルバーの帽子を奪いあうようになったという変化もあらわれてきています。



とても内容のある研修でした。山口の皆さんに心から感謝します。



保健婦さん
からの
アドバイス

高齢者の健康管理シリーズI

食中毒

|| 味やにおいを信じまい ||

高温多湿の日本の夏。梅雨どきから九月ごろにかけて食中毒に気がつきたい。

奥さんが二年前に多界され、それ以来、一人暮らしの七十六歳の男性が腹痛、吐き気、嘔吐、下痢、三九度の発熱を訴えて来られた。食中毒のようだ。

「もつたいないからと、一晚冷蔵庫にとつておいて食べました」と、どうやら、昨日食べたアジの刺し身が原因のようである。

食中毒のうち、この季節に多いのは細菌性食中毒である。これは腐敗とは違うため、色にもにおいも変わらないことが多いため厄介である。

細菌性食中毒の一つの型は、食中毒菌が食品に付いて繁殖し、腸内で



イラスト 佐古百美さん

さらに繁殖して発病するものである。海中に住む菌によるのが非常に多く、刺し身、すしから感染しやすい。生鮮魚貝類を調理した包丁、まな板、ふきんなどに残っている菌によることもある。

お知らせとお願い

新年度をむかえて、事務局も各方面との契約等であわただしくなってきました。

今年度も皆さんお元気で、安全な就業に心がけるようお願いします。

「お知らせとお願い」

一、今まで就業希望の方は全員事務局に集まって就業先等をお知らせしておりましたが、今年六月より事前に電話でお願いすることに變更しました。

二、センター会費(年間一、〇〇〇円)未納の方は早急に納入してください。ただし、就業されている方は配分金より天引きさせていただけます。

三、会員の慶弔、花見、忘年会等の助成のため互助会を組織しております。毎月二〇〇円です。まだ加

もう一つの型は、食中毒菌が繁殖するときに作り出す毒素によるものがある。

食中毒を予防するため、食品を食中毒菌の汚染から守り、保存する前に加熱し、冷蔵庫を過信せず日がたった食品は思い切りよく処分しよう。生ものは、その日のうちに食べてしましましょう。

(駒広島健康福祉センターの「おだいじに」から転載)

著者 檜脇 千里氏

事務局だより

入されていない方は是非加入するようお願いいたします。

なお、互助会は旅行会の積立も行っています。(毎月二〇〇円)年一回の親睦旅行のための積立です。併せて加入するようお願いさせていただきます。

四、事務局職員の一部担務変更のお知らせ。

池本大作さんを事務局次長に、角川伍助さんが定年となりましたので澤岡澄子さんを職員に採用し、主として交流館業務を行います。

なお、角川さんは引続いて嘱託として勤務されます。

以上、担務を一部変更しましたが、同じメンバーで頑張りますので、旧年度に倍してご協力よろしく願います。

編集後記

やつと第三号の編集が終わりしました。最初は四ページで編集したので、平成五年度の事業報告を入れたほしいとの要望があり、四ページではおさまらず、急ぎよ六ページにすることにしました。

ところで、会員の皆さんから、「もつと発行回数をふやして……」というありがたい要望をたくさんいただき、編集会議の折に検討した結果、十月に臨時号を出そうと決めました。内容は会員の紹介が中心です。編集委員会は、皆さんの自己紹介を一〇〇字以内で書いていただき、それを載せたらと考えました。九月始めに依頼文に原稿用紙をそえてお送りします。すすんで自己紹介を寄せていただければと思っています。暑さが厳しくなります。くれぐれも健康に留意され、安全に作業を進められることを願って後記をおわります。

